

オリヴァー・ゴールドスミスと日本の近代

——『荒村行（ディザーターティッド・ヴィレッジ）』の受容とその解釈の変遷——

川 戸 道 昭

日本の近代詩が西洋の詩の紹介と翻訳にはじまるということは一般によく知られた事実である。なによりもそのことを端的に示すものとして、わが国の近代詩成立のきっかけを作ったといわれる、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の三名による『新体詩抄』をあげることができる。一八八二（明治十五）年八月、丸善より刊行されたこの詩集に掲載されている詩は合計十九篇、その内の実に十四篇までが西洋の詩の翻訳であり、創作はわずか五篇を数えるに過ぎない。この事実一つをとっても日本の近代詩の成立に翻訳詩が果たした役割の大きさをうかがい知ることができるというものだが、ここでわれわれが注目しなければならぬのは、井上や外山がこの翻訳を主体とする詩集に『新体詩抄』という題名を与えていることである。「新体詩」という名称は、井上らが自分たちの新しい形式の詩を、それまで日本において主流を占めてきた「旧体の詩」、すなわち漢詩に対置させる意図のもとに与えた名称であり、『新体詩抄』以前に新体詩なる言葉はほとんど知られていなかった。彼らに新しい詩のジャンルを確立しようというはつきりした自覚があったかどうかは別にして、この詩集以降、新体詩は名実ともにわが国の読者の間に根を下ろしていったということから判断すると、結果的にこの詩集が日本における近代詩成立のきっかけを作ったと考えるいいだろう。その旧体の詩⇨漢詩に対置すべき新体の詩の実体が、つまるところ西洋の詩の翻訳や紹介であったということは、やはり、日本の近代詩が成立する過程において、欧米の詩の翻訳が果たした役割には大変重要なものがあつたと考えざるをえないのである。

では、その重要な役割を担った翻訳詩とは一体どのような詩であつたのかということだが、『新体詩抄』に載っている西洋の詩は、グレイ、キャンベル、テニソン、ロングフェローなど、主として英米の詩人達の比較的短い作品であつた。そのほか、『新体

詩抄』には収録されていないが、この詩集が編まれた明治十五年前後に日本の読者に受け入れられていたものとして、ワーズワスやバイロン、ゴルドスミスなどの詩をあげることができる。英米の詩が多かったというのは、当時英語を学ぶ人口が他のヨーロッパ言語を学ぶ人口を圧倒しており、舶来の英語リーダーなどを仲立ちとして英米の詩にふれる機会が多かったということ、を単純に反映しているにすぎないものと思われる。したがって、その点を深く掘り下げてみてみたいという意味は見出だせないだろう。問題はることより、それらの英米の詩人の作品が当時の読者、とくに知識人たちにどのように意識され理解され、どんな形で独自の批評、創作につながられていったか、ということである。つまり、それらの翻訳詩が、わが国における近代詩の成立にいかなる貢献をしたかということこそ、まず第一に考えてみなくてはならない問題のように思われるのである。

そうした近代詩の成立に及ぼした西洋の詩の影響を考える際に、是非ともここで取り上げてみなければならない作品の一つに、オリヴァー・ゴルドスミスの *The Deserted Village* (一七七〇年刊。以下明治時代の呼称にならって『荒村行』と表記する) という作品がある。¹⁾これは、十八世紀後半のイギリスの農村生活を描いた四三〇行からなる中篇の詩で、ヨーロッパにおいては十八世紀、十九世紀と幾世代にもわたって読み継がれた田園詩の一つであった。同時にそれは、明治時代の日本においても、大変な人気を博した作品の一つで、古くは中村正直にはじまり、志賀重昂、徳富蘇峰、内田魯庵、北村透谷、宮崎湖処子、戸川残花、夏目漱石、洪江羽化、大和田建樹、坪内逍遙、千葉江東、久保天随、高須梅溪と、何人もの文人がその翻訳や評論を発表している。²⁾しかも、そうした諸家の大半が、彼の詩をまるでそれまで慣れ親しんできた漢詩に接するような態度で受け入れ、愛読しているのを見ると、ゴルドスミスほど深くかつ長期にわたって明治の人々から愛好された西洋の詩人はいなかったのではないかと気がえしてくる。

なぜゴルドスミスはかくも多くの文人や知識人、さらに一般の読者から愛好されたのか。この問題に答えることは、同時に、西洋の翻訳詩が日本の近代詩の成立に果たした役割を探るといって、先ほどの問題に答えることにもなる。ゴルドスミスの『荒村行』は、漢詩と対比され論じられることが多く、西洋の翻訳詩を中心とする新たな形式の詩が、旧来の詩との対比の中でどのように意識され、理解され、わが国の土壌に根差していったかということを知るのに、これ以上貴重な情報を提供してくれる資料はないと思われるためである。加えて、この詩は、明治初年から三十年代の後半に到るまでの多種多様な文人が愛吟しそのコメントを発表していることから、西洋の詩に対する明治人の解釈の変遷を辿るのに大変都合がいいということもある。とくに、

『荒村行』をめぐる解釈には、明治の前半と後半、つまり政治、経済、文学、科学等々あらゆる領域において急速に日本の近代化が図られる明治三十年頃を境に、はっきりとした変化があらわれることから、単に個々の作家の解釈の変遷ばかりか、明治期全体の翻訳詩に対する理解の変遷を辿る上でも、またとない手がかりを提供してくれるように思われるためである。ゴールドスマスというと、すぐに思い起こされるのは、彼の中編小説 *The Vicar of Wakefield* 『ウエイクフィールドの牧師』(一七六六年刊) という作品であるが、実は、この小説がまた『荒村行』に劣らないほど、明治の人々に大変愛され親しまれた小説であった。⁽³⁾ 詩と小説の違いはあるが、二つの作品は登場する人物の性格その他の面で共通する部分が多々見受けられる。本稿においてはそうした共通点も考慮に入れながら、『荒村行』が日本の読者に受け容れられ、やがてそこから独自の評論、創作が生み出されていく状況を検証してみることにする。

一 英詩と漢詩——明治二〇年代までの解釈

明治の前半、日本においてゴールドスマスの詩が大流行をしたのはなぜか。その主な理由として考えられるのは、彼の詩が田園生活を詠ったものであり、その詠われた情景に東洋の詩の余韻・含蓄に通じるものがあつたためではないかと思われる。ゴールドスマスの詩に東洋的詩情を感じさせるものがあつたということに関しては、彼の作品、とりわけ『荒村行』がしばしば漢詩との対比の中で論じられているという点からも推察可能なところであろう。

たとえば、一八八九(明治二十二)年九月、『女学雑誌』に「ゴールドスマスを評す」と題する一文を寄せた内田魯庵は、その冒頭で「余常に田園村居の詩を好み古今詩人中最も陶靖節(淵明)を愛す」と前置きした上で、彼が会う人ごとに「其妙を」喧伝してやまなかつたというこの中国の詩人の作品や伝記を処々に引いて、独自のゴールドスマス論を展開している。その論の一端を示すと、「蓋し靖節は五斗米の為に腰を折らずと嘆じて五柳先生と称して隠るゝものなれば其の作斯の如きは怪しむに足らざれど、唯ゴールドスマスが一生貧苦不足の中にありて文字に現はるゝもの快活なるは其性質の然らしむるなるか」といったことである。この時代、最も人口に膾炙した英詩はなんといってもグレイ(Thomas Gray, 1716—71)の『墳上感懐の詩』(An Elegy

Written in a Country Churchyard）であつたと思うが、魯庵は、「是を喜ばずして却てゴールドスミスの *The Deserted Village* を愛す」と断言してはばからない。そのわけは「グレイの景を写すに密なるは遙かにゴールドスミスに優れども終に後者の情を描くに巧なりしに及ばぬためだ」といふのである。

西洋の詩を論じるのに漢詩を引き合いに出すというのは、この時代にあつては、決してめずらしいことではなかつた。たとえば、戸川残花なども、主にキリスト教系の作家・知識人が寄稿していた雑誌『三籟』に前後三回にわたつて「詩伯ゴールドスミス」と題する文章を連載し、その初めの部分で、ゴールドスミスの詩と杜甫や陶淵明の詩の異同を論じている。彼は、「東西の詩人を比較して其類を求むるは、元より為す可からざる事に近しと雖も、其姿態に同一なる神韻の全く見る可からざるには非ず。試みにゴールドスミスの長篇を読み、之を老杜の律絶と対照し、蘇東坡の格調と比較し、青邱の長短篇と並べ見る時には彷彿の中に氣韻の粗々感通するあることを覚ゆ」といつて、実際に杜甫とゴールドスミスの詩に共通する「氣韻」を、具体例を引用しながら解説している。

序文の中でも触れた通り、当時、詩といえは一般に漢詩を指し、和文をもつてつづられた新工夫の詩にはわざわざ「新体の詩」という呼称が与えられていたほどであつた。知識人ばかりか、ごく普通の教養を積んだ人々の間においても、漢詩を詠むことが盛んにおこなわれ、毎年夥しい数の漢詩作法に関する書物が刊行されていた。このような時代にあつては、西洋の詩を論じるのに、まずは東洋の詩、漢詩との対比をもつて始めるのが一番手取り早い方法であつたことは容易に推測される。

ゴールドスミスの詩に限らず、他の欧米作家の詩においても、漢詩と対比され論じられる例は少なくなかつた。たとえば、宮崎湖処子が民友社の「拾式文豪」シリーズの一卷として発表した『ラルヅラルス』(かの英国の詩人 *W. Wordsworth* の名前を湖処子6こんなふうにつづっていた)という評論は、最後に「詩人後記／ラルヅラルス及び陶淵明」と題して三十頁ほどをこの東西兩大家の比較に充てている。いくら自然を題材とすることで知られた二人の詩人とはいえ、さすがにこの取合わせには少々首を傾げたくなる者もいたとみえ、北村透谷、島崎藤村らが名を連ねた当時第一級の文芸誌『文学界』の書評には「いともいともめでたきは詩人後記の篇にて、唐土の詩仙陶淵明とくらべて論ひしことにある、かゝる事の大和の文字を解するものゝみ知らんは口惜しければ、高橋五郎先生なりとも煩はして、アーノルド、ペーターなどいふ彼国の評家を驚かしては如何に。よしやフワウスト、マンフレッド、フリッチオなどを生せしこの世紀の始に於て、テインターンの精舎に世にいぬ昔をしのび、ライダルの山頭に

人間の命運をかむがみし彼のインパッションド、コンテムプレーターも、借金をせぬ田園生涯とめられて、これもよしやかれもよしや、巻頭の肖像のみぞ一の獲物なりける」という、冷やかし口調の酷評が載っている。

しかし、このような批判を根拠に、当時なされた西洋の詩と漢詩の比較をすべて当を失した無益な行為として、しりぞけてしまふわけにはいかないだろう。なにしろ、知識人にしても一般読者にしても、西洋の詩の何たるかがほとんどわかっている時代のことである。現在の読者の見方からすれば、単なる思いつきにすぎないような強引な比較であっても、西洋の詩を全く知らない当時の人たちには、中間に既知の詩と漢詩をおいてみることに、多少なりともそれを身近なものに近づけることができると感じられていたのである。実際、そうすることが、批評家が評釈を加えるにも、一般読者が西洋の詩に親しむにも、当時の慣行となっていた観さえ見うけられるのである。

このことは、明治二十年代の詩歌の流行を考える際に、見落としてはならない大変重要な点だと思う。当時なぜゴールドスマスが読まれたのか、ゴールドスマスのどういう部分が彼らに受け容れられたのか、そのことを知る上で、比較の対象となった中国の詩人、あるいはその作品は、またとない手がかかりを与えてくれるように思われるからである。当時の読者の多くが西洋の詩の中に見いだした東洋的「気韻」とは、一体どういうものであったのか、その点を『荒村行』とその比較の対象となった漢詩の比較・照合を通して、詳しく分析してみることにはしたい。

理想の楽園

まずは『荒村行』一篇の内容の説明からはじめると、それは、十八世紀後半のイギリスの農村風景が、過去の田園風景と対比されながら描き出されたものである。そのころのイギリスは、生産の基盤が家内制手工業から工場制工業へと変化していった、いわゆる産業革命の渦中にあつた時期で、農村を含む社会全体に大きな混乱がみられた。したがって、そこに描かれている農村は、それまでの牧歌的雰囲気をたたえた農村風景とは少々違う。かつては人々の笑い声にわきかえっていた麗しの村・オーバン（架空の地名）であつたが、土地のすべてが一人の大地主の手に帰して以来、純朴の民は異郷の地へと追い立てられ、農地は荒れるに委されて、村全体がひっそりとして見る影もない。その蕭條たる廢村落をみるにつけ、草笑い、水の歌った昔の賑わいの様子が懐しく胸に蘇り、その光り輝く野山の中で日々質素な生活を送っていた純朴な村人たちのことが思わず脳裏に浮かび上がっ

てくる。『荒村行』一篇の趣旨は概略そういうものだが、この詩の特徴は、惨状目を覆うばかりの荒廃した村の現状と、以前の平穏な田園生活とが対比されながら描き出されていくという点にある。

その冒頭の一節を、初期の翻訳詩の実例を示すという意味で、一八九四（明治二十七）年に発表された大和田建樹の翻訳とともに掲げてみると、次のようなものであった。

SWEET AUBURN, loveliest village of the plain,
Where health and plenty cheered the labouring swain,
Where smiling spring its earliest visit paid,
And parting summer's lingering blooms delayed,
Dear lovely bowers of innocence and ease,
Seats of my youth, when every sport could please,
How often have I loitered o'er thy green,
Where humble happiness endeared each scene;
How often have I paused on every charm,
The sheltered cot, the cultivated farm,
The never failing brook, the busy mill,
The decent church that topt the neighbouring hill,
The hawthorn bush, with seats beneath the shade,
For talking age and whispering lovers made.⁽²⁾

《わっはん 楽しき村よ王晩よ／わが最愛の此村よ／その健康と豊饒に／慰められて歛とりし／民の愉快は幾ばくぞ／里の幸福いかほどぞ／春は早くも音づれて／まづ此村に影を見せ／夏は長くもどまりて／花に飽かせぬ年もなし／あはれ罪なき村里よ／わ

が安楽の王晩よ／たのしき内に送りたる／わが少年の故郷よ／しづかなる身の幸福を／さまよはせつる野はそこに／けしきに富みて面白く／かゞやく野辺は猶そこに／木の間に見ゆる庵のさま／流れ絶えせぬ水の声／廻りて止まぬ水車／岡を占めたる田舎寺／緑の陰の床几には／話ずきなる老人と／さゝやかかはす恋人を／常に迎へし□原／ながめに入りて幾たびか／たのしき影を画がきけん」

明治二十年代中ごろ、内田魯庵や戸川残花とはまた違った方法で、それも極めて学問的な手順を踏んで、この詩に描かれた村の本質を論じた人物がいる。当時、いまだ帝国大学の学生であった夏目金之助、後の漱石その人である。一八九三（明治二十六）年一月、彼は文科大学の講演会で「英国詩人の天地山川に対する観念」と題する詩論を発表し、アレグザンダー・ポープにはじまりウィリアム・ワーズワスに至るまでの英国詩人を中心に、各詩人の自然観を分析し、それぞれの詩論の比較にまで詳細緻密な論を及ぼしている。その独自性といい、洞察力といい、系統だった論旨の展開方法といい、単なる印象批評の羅列の或を出なかつた、この時代の他の論文を圧倒するものであつた。

《蓋し「ゴールドスミス」の愛する景色は、□□の山にあらず、洗洋の水にあらずして、温籍平穩の楽境にあり。一壺の別天地 Where smiling spring its earliest visit paid/And parting summer's lingering blooms delayed と云ふ様な処にして、其仙郷染みたる景物中には、人物が生息して、而も安楽無事に閑生涯を送らざるべからず。必ずや The shelter of cot, the cultivated farm, The never-failing brook, the busy mill を具せざるべからず。必ずや 春草氈の如く、春草油の如く、老幼は相携へて其上に遊び、少長坐を分つて其傍らに坐せざるべからず。左らば其山川を愛するは、夫程山川其物を愛するにあらず。山川善く朴温厚の民を撫育し、都会の紅塵桃源の仙郷に到らざるが為のみ。故に人は主にして、山川は客なり。只に客なるのみならず、深山大澤無人の境に至つては、歩を回らして却走せんとす。》

ゴールドスミスの描く自然にあつては「人は主にして、山川は客」、ただ「客」であるばかりか、「深山大澤無人の境に至る」と、歩を廻らして逃げ帰るといふのである。これを、内田魯庵風に表現すれば、グレイは「景を写すに密」で、ゴールドスミス

は「情を描くに巧」であったということになるかと思うが、いずれにしても、ゴールドスミスの自然はあくまでも人間あつての自然であり、自然に囲まれた村人の生活、それが彼の詩の中心テーマである。しかもその中心におかれている田園描写の大半は、過去の農村風景、詩人が現実の荒廃した村の状況を目の前にして、懐旧の情に流されつつ心に想い描いた過去の理想的な農村風景である。つまり、それは詩人の心の裡にのみ存在する架空の楽園、理想の浄土であり、漱石がゴールドスミスの村を説明するのに、「温籍平穩の楽境」、都会の紅塵の飛んで到らぬ「桃源の仙郷」といった、東洋の詩人の描く理想の楽園のイメージを想起させる言葉を使用しているのも、当然その辺を意識してのことであつたと思われる。

『荒村行』に描かれている村が詩人の頭の中で美化された理想の楽園であるということは、この詩を読む誰の目にも明らかであり、とくにここで強調するほどのことでもない。われわれが注意を向けてみなければならぬのは、そのことよりも、漱石を初めとする多くの明治の読者には、この詩に描かれた理想の楽園が、陶淵明の描く桃源郷のように映っていたという点である。今の日本人で、『荒村行』の村から陶淵明の理想郷を連想する者が、はたしてどれだけいるだろう。仮にいたとしても、それはごく限られた数であるに違いない。それだけに、この連想の背景には明治期特有のもの考え方が働いていたと思われ、詳しい分析が必要とされるところだ。彼らがオーバンの村から桃源郷を連想したのは、単に詩人の描いた理想の世界という上辺の共通点だけが原因であつたのか、それともその背景にはもつと異なる要因が働いていたのか、東西二人の詩人の創造したそれぞれの楽園の成立事情なども考慮に入れながら、その辺のところを少々詳しく分析してみることしよう。

西洋であれ、東洋であれ、詩人をして架空の楽園に向かわしめる最大の要因は、現実世界に対する不満、これをおいてほかにない。菊を手折り、悠然と南山を眺めて暮らしていたかに見える陶淵明^(一)だが、その心中には満されぬ現実への不満がいつ晴れるとも知れない霧のようにわだかまっていた。「我五斗米の為^{ため}に、腰を折りて郷里の小人に向かう能^{あた}わず」と、役人生活に見切りをつけて田園の居に帰る決心をした彼ではあつたが、その行く手に待ち受けるものが、貧困と孤独と過酷な労働であつたことくらいは百も承知していたはずである。「帰りなんいぎ／田園將^{まさ}に蕪^あれんとす」と詠^{うた}じるその心には、久しく樊籠^{はんろう}のうちにあつた野の鳥が、また自然に帰ることのできる喜びとともに、高い識見と能力を有しながら現実社会から締め出されるという負け犬にも似た挫折感が入り交じっていたに違いない。彼は自然を謳い、酒を謳い、隠者の心境を謳う。そしてさらに現実には存在しえない虚構の世界Ⅱ桃源郷を創造し、そこに自らの魂を遊ばせる。しかし、このように一見悠々自適に見える彼の心の裡にも、人知

れぬ苦々しき思いが存在していた。押さえても押さえても、ふつふつと沸き上がってくる挫折の意識、強い政治的関心を胸に宿しながら、現実社会を動かすことのできる環境から締め出されているという疎外感が、心の底にわたかまっていた。「少きより俗に適うの韻べなく／性 本と邱山を愛せしに……」、と彼が盛んに自然の見たる自己を主張するのも、飄々として人生を達観した隠者の生活を謳歌するのも、現実とはうらはらの牧歌的架空の世界に魂を遊ばせるのも、結局はこの彼の心の奥深くに潜む挫折感が、いい知れぬ孤独感が、彼をして自然にそういう方向へ向かわせたと見ることができるのではないだろうか。そのように考えることよって初めて、自己の内心のいたみが高い詩的境地へと昇華させた詩人の強固な意志の力が、また、その詩の深い味わいが一層よく理解できるというものではないだろうか。

ゴールドスマスの場合においても、同様に、彼を虚構の世界の創造へと駆り立てたのは、現実の世界に対する満たされぬ思いであった。それは、『荒村行』の中の「……であった」と過去形でつづられている美化され純化された世界が、「……である」と現在形で描出された荒廃した現実世界の対極的世界をなしている、ということからも容易に推測できるところだろう。明治の読者の多くは、さらにこの創造された理想世界と、詩人個人の窮乏生活を重ねあわせて、その背後に陶淵明にも見られるような、現実の不満を高雅な詩的境地へと昇華させた、詩人のたくましい精神力を読み取ろうとする。

そうした姿勢は、たとえば、内田魯庵の「ゴールドスマスを評す」と題する評論の中にも、はつきりと見てとることができ。「エリサベス時代の文学者最も不遇なりしが斯る人の常として厭世的の句口に出るは当然にして其作りしもの悉く不平不満の気を帯び時を毀り世を嘲り以て自ら慰む。独りゴールドスマス貧に生まれ貧に死し食に一粒一片なく曩中錢なく債主門に迫れども忻然楽む処あるが如し。故に口に出づるの句毫も厭世的の気なく、”The Deserted Village”の如き惨澹たる題目に於てすら満目蕭條の舊村落を写すの中に太平の氣象自ら溢るゝの辺あり。」

魯庵だけではない、戸川残花、渋江保、高須梅溪等々、この時代にゴールドスマスの評伝をものした作家のほとんどが、心底思いやりの気持ちを含めつつ、彼の生活の窮状の描写に特別の紙幅を割いているのである。『荒村行』が人口に膾炙する一方で、何種類ものゴールドスマスの評伝が発表されたということには、恐らくこの、作品と作家の生き方を重ねて、そこに作家の到達した詩的境地を量るといふ、明治人特有の読書姿勢が関係していたものと思われる。彼らは、ゴールドスマスの貧苦に晒された一生と、貧苦をものともしない泰然とした生き方に注目し、それを詩人の並々ならぬ精神修養の結果と考え、そうした生き方を

可能にした意思の力こそ、満目蕭条とした廃村落の描写の中にも、「太平の氣象」の溢れ出る彼の詩風の源泉であると考えていたのである。彼らが『荒村行』から陶淵明の詩を連想したというのも、背後にこの、自己の心の苦しみを高い詩的境地へと転じて見せた、詩人の意思の力に、あるいは精神修養の結果に、双方あい通じあうものを見いだしていたからこそなのである。

理想の境地

明治の読者が、ゴルドスミスや陶淵明の理想の樂園にしばし心を遊ばせて楽しんだと思われるのは、その樂園の中で得られる物質的な快適さではなくて、そのような樂園において初めて可能となる理想的な生き方、あるいはその様な樂園の中でのみ享受できると思われる理想の境地であった。あくまでも中心となるのは心であって、物質は徒だ。日々勞苦に晒されながら、貧困に喘ぎながら、彼らは同じ貧しい境遇にあった高潔の詩人が、貧苦などものともせず示してみせた高雅の境地にしばし浸って心の慰みとしたのだ。その彼らが、とりわけ高い境地に到達した人物として仰ぎ見ていたのが、陶淵明描くところの超俗の士、五柳先生であった。

《先生は何許の人なるかを知らざるなり。亦た其の姓字を詳かにせず。宅辺に五柳樹有り、因りて以て号と為す。閑靖にして言少なく、榮利を慕わず。書を読むことを好めども、甚だしくは解することを求めず。意に会すること有る毎に、便ち欣然として食を忘る。性酒を嗜むも、家貧しくして常には得る能わず……》

一方、同じようにゴルドスミスの脳裏にも理想の人物像が存在した。それがまたどういふわけか、東洋の僧侶や隱者に通じる氣風をたたえた人物で、田園に居を構え、權勢を求めず、榮利を慕わず、清貧に甘んじ、ただ純朴の民と交わることにのみ生きがいを見出だすような人物であった。そのような人物の典型として最もよく知られているのが、『ウエーク・フィールドの牧師』に登場する主人公プリムローズである。牧師であると同時に五人の子供の父親でもある無類の好人物プリムローズが登場するこの小説がまた、『ヴィカー物語』の愛称のもとに、明治の人々から大變親しまれた小説の一つであった。明治二十年代から三十年代にかけて、全国様々な学校において英語のテキストとして採用される一方、翻訳も明治期だけで三種類のものが出版され、英

米の翻訳小説としては、デイケンズの『クリスマスキャロル』やアーヴィングの『スケッチブック』とならぶ、明治期屈指のベストセラーとなっていた。漱石などもこれを愛読書の一つに加えていたらしく、現在残されている彼の蔵書の中には英語の原書の他に仏語訳の翻訳もみえる。また、彼の「¹⁸則天去私」の文学観ということに関して、「則天去私」の立場が具現化されている作品として『ウエークフィールドの牧師』をあげたということも、文学界においてはよく知られた話である。¹⁹

ゴールドスマスにとつて、このプリムローズという人物が、いかに彼の心に存在する理想の人物像に近いものとなっていたか、それは『ウエーク・フィールドの牧師』の四年後に発表された『荒村行』において、再び同じ鑄型から作られた村の牧師が登場してくるのを見てもわかる。すなわち、古き良き過去の時代のオーバンの村に存在した牧師がその人物というわけだが、彼は、プリムローズ同様、田園に居を構え、栄利を追わず、権勢を求めず、ただ、ひたすら純朴の民の心の支えとなることに喜びを見いだしていた人物であり、散文でつづられたプリムローズをそのまま韻文に書き改められた人物といってもいいほどよく似た氣質の人物であった。

ウエイクフィールドの牧師同様、このオーバンの牧師も明治の人達から大変愛され親しまれた人物の一人で、例えば民友社の総帥、徳富蘇峰なども、「新聞記者」と題する、とくに英文学に関係の深い内容でもないごく普通の文章の中で、「恰もゴールドミスが詩中の牧師の如く、其心、寥廓たる天上に在るときには、中間の風雷振動、雲霧晦冥するも復以て何の煩はずところか有らん」と、その高潔な人格を喩えに引いている。

あるいは、『西国立志編』の著者中村正直も、外山正一らの『新体詩抄』が刊行される七年以上も前に『荒村行』の中のこの山村牧師の登場する部分を翻訳して、自らの愛吟歌集に加えていたほどだ。面白いことにその訳は漢文訳であり、それを読むとキリスト教の聖職者というより、むしろ東洋の僧か隱者の面影が彷彿としてきて、覚えず誰か東洋の詩人の作品を読んでいるような気にさせられる。ともあれ、これは日本における西洋の詩の最も早い翻訳例であるばかりか、明治の人々がオーバンの山村牧師を、あるいは『荒村行』の詩全体をどのようなイメージで捉えていたかを示す大変貴重な資料であると思われるので、以下にその訳文の一端を掲げてみることにしよう。

僻村牧師歌 訳英人ゴールドスマス詩意

一叢樹林困小屋。中有牧師守幽独。一年所得僅□金。自謂衣食既豐足。不解諂諛不求權勢。不変其說以適時俗。不顧其身陞高位。貪世間難恃之利祿。但願扶起窮民無告者。同受來生無疆之真福。門前豈有長者車。案上豈有貴人牘。臭穢□子是賓客。……寺觀說法会老幼。温然其容諷其言。彼或欲嘲而來者。聞之感悔讚真神。会散牧師步歸家。野人簇擁皆真純。村童自後戲牽衣。欲博師之笑開脣。師果□然回其頭。慈父之愛見于顔。茲輩有憂師代傷。茲輩有喜師代欣。吁嗟乎牧師虔誠人。身在塵世心在天。君不見高山腰脚纏風雨。日光永遠照其巔。⁽²¹⁾

〔維新後何年も経ないごく初期の段階の、しかも漢文による訳というだけあって、原文とは多少ずれる箇所も見受けられるが、参考までに後半の「寺觀說法……」以下の原文を掲げておく。〕

At church, with meek and unaffected grace, / His looks adorned the venerable place; / Truth from his lips prevailed with double sway, / And fools, who came to scoff, remained to pray. / The service past, around the pious man, / With steady zeal each honest rustic ran. / Even children followed with endearing wile, / And plucked his gown, to share the good man's smile. / His ready smile a parent's warmth express, / Their welfare pleased him, and their cares distress. / To them his heart, his love, his griefs were given, / But all his serious thoughts had rest in Heaven. / As some tall cliff that lifts its awful form / Swells from the vale, and midway leaves the storm, / Tho' round its breast the rolling clouds are spread, / Eternal sunshine settles on its head.⁽²²⁾

『新体詩抄』に掲載されている翻訳詩の多くが詩と呼ぶには値しない稚拙な翻訳であるのとは対照的に、こちらの方は秀逸といつてもいいほど優れた翻訳である。敬宇中村正直の漢・洋の文学に対する造詣の深さを示すと同時に、当時の日本における文学への理解と鑑賞の水準が決して低くなかったことをうかがわせる好例といえるだろう。今の文学史などでは西洋詩移入の魁をなしたのとして新体詩のことがばかりが喧しくいわれるために、その拙劣な訳文に接した読者はこの時代全体の文学に対する理解が低いレヴェルにとどまったと考えがちであるが、それは違う。当時、第一級の文学の鑑賞眼をそなえた人たちは、西洋詩の翻訳に携わった人よりは、むしろ漢文学に通じた人たちの間に多く存在した。彼らは、すでに数百年の伝統の中で培われてきた

繊細な詩情と鑑賞眼を身にそなえた人たちであり、彼らが英語を学んで西洋の詩を日本に移植しようとする際に、頼りとしたのは、いまだ実態の定まらぬ口語中心の新文体ではなく、やはりこの中村正直のように江戸以前から慣れ親しんできた旧文体（漢文体）であった。残念ながら、そういうことを試みた人はそう多くはない、しかし実際にそれを試みた場合は、この「僻村牧師歌」のように、同じ『荒村行』を新文体に訳した大和田健樹や久保天随らの翻訳をはるかに凌ぐ高い文学的水準を示していたのである。「かくの如き人の詩情や鑑賞の繊細と敏感とは到底新体詩人などの足もとにも及ぶどころでない。……和漢に通じ兼るに英仏語を以てして而も新派体の詩文に走らず悠々と既成詩文を固守して名を埋み跡をかくして亡び去った人が、明治十代二十代にどれ程あつたか、恐らく歴史の結果のみで勘定したがる現代人の想像以上の数とその逸材の資の優秀とがあつた事と推しはかれる。」⁽⁴⁾日夏耿之介が、当代「最もセンシブルな守舊派の代表」と呼ぶ池袋清風について語ったこの一節は、そのまま中村正直の場合にも充当することができるだろう。

ともあれ、その内容の方だが、ただでさえ東洋的な「気韻」の漂う『荒村行』が、このように漢文の七言長歌の形式におき換えられると、ますます陶淵明や良寛など東洋の詩人の作風に近づいたような気がする。これは一八七五（明治八）年以前に書かれたものといわれるが、この訳文一つをとつても、明治前半の知識人たちの西洋詩歌に対する鑑賞法は、今とはまた違う一種独特なものであつたことがわかる。彼らにはすでに漢詩や和歌の鑑賞を通して培った好みの傾向というものが存在し、それが西洋の詩の良否を判断する際にも大きくものをいっただ。つまり、彼らの西洋の詩に対する接し方というのは、まずその「姿態」の中に東洋の詩風に通じる「気韻」を探し求め、それを具体的にあい似た詩風の東洋の詩歌と重ねてみることによって、行間に漂う馴染みの余韻・含蓄を楽しむといった体のものであつた。

中村正直の「僻村牧師歌」を読んで、キリスト教の聖職者よりも東洋の僧侶や隱者の生活が想起こされるといふのは、訳文が漢文であるということのせいだけではない。確かにそうした形式上のことも大きな理由の一つには違いないが、形式に加えて、そこに登場する人物自身、つまりその内容自体にどこか東洋的な雰囲気に通じるものが存在するということもまた否定しがたい事実であつた。要するに、それは、中村正直の直感が西洋の詩の中に探し当てた、彼にとつてすでに馴染みの「気韻」ということになる。

「荒村の詩一篇余是を読んで三年日常に其妙を称するを絶たず」、と明治の人から熱烈に愛された『荒村行』であつたが、それ⁽⁴⁾

もそのはずで、そこに描かれているのは都会の紅塵のいまだ及ばぬこの世の楽境、そしてその楽境に暮らすのは純朴質素な村人や彼らと苦楽を共にする高潔の牧師というように、明治の人々の好みにまさにうってつけの人物や世界であった。前段のこの世の楽境の部分に目を止めれば、陶淵明描くところの理想の村落「桃源郷」のことがほのかに想い起こされ、そして後半の世俗を超越した孤高の生き方のほうに目を向ければ、同じくその理想的人物「五柳先生」の面影が彷彿とする。明治の読者に『荒村行』が好まれた理由はまさにこの「桃花源の記」、「五柳先生伝」の世界に通じる、日本人にもすでに馴染みの東洋的詩風にあったということが出来るだろう。

明治二十年代の半ばになると、このゴールドスミスが描く理想の楽園は、日々の苦難にあえぐ多くの日本人にとって、一つの心の支えとなっていた。それは、ちょうど西行法師が「さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵いほりならべむ冬の山里」と詠じた歌の中の（山村の庵）にも匹敵する心の安息所であった。日々の生活が辛酸を極めればきわめるほど、苦難に満ちれば満ちるほど、われわれはそうした心の拠りどころを渴望する。ゴールドスミスの村里は、多事多難な人生にほとほと神経をすり減らしてしまっている多くの人々が、いつかはそこに帰って静かな余生を送りたいと願う人生の最終的な帰着点に擬されるまでになっただけだったのである。

ゴールドスミスの田園を、そのような精神的安息所と捉え、それを自作のなかに反映させていった作家の一人に北村透谷がいる。透谷は、その名も「三日幻境」と題する自伝的追憶記の中で、『荒村行』の詩句に自己の心境を巧みに絡ませながら、独自の夢幻境を創りあげていった。

《人生何すれぞ常に忙促いそやくたる、半生の過夢算かたふるに違ちがなし。悲しいかな我も亦た浮萍うきへいを追ひ迷雲めい雲を尋ねてこの夕徒ゆふすいたうらに往事

を追懐するの身となれり。
常に惟ふ志を言ひ志を行はんとするものは必らずしも終生を勞役するに及ばず。詩壇の正直男（ゴールドスミス）この情を賦かして言へることあり。

I still had hopes, my long vexation past,

Here to return—and die at home at last.

浮世に背き微志を蓄へてより世路酷だ峭嶮烈々たる炎暑凄々たる冬日いつはつべしとも知らぬ旅路の空をうち眺めて
屡 正直男と共に故郷なつかしく袖を涙にひぢしことあり。》

こう前置きしたうえで、透谷は七年前、彼がまだ「早稻田」の学生であった頃、心を「迷はせし、一幻境」について語りはじめる。その「幻境」とは、透谷が、民権運動に身を投じた十代半ば、同志の大矢正夫、秋山國三郎とともに一冬を過ごした東京八王子の西北・川口村を指す。彼ら三人は、山村の一室に「同臥同起」して、超俗の「幻境」生活を送った。それから七、八カ月を経た明治十八年十一月、友人の大矢は、朝鮮に革命を起こし日本を揺さぶるという計画（いわゆる大阪事件）に参画し逮捕される。透谷も事前にその計画に加わることを求められたが、思い悩んだすえ、頭を丸めて放浪の旅に出る道を選んだ。その選択が、結果的には「義友」を裏切ることになり、彼はそれのために「幾多の苦獄」を「経歴」する。この苦渋に満ちた選択から七年、大矢、秋山と再会すべく、再びこの「幻境」を訪れたときの一部始終が、過去の追憶とともに語られるというのが「三日幻境」一篇の趣旨である。

若き日の苦悩に満ちた心の軌跡がつづられたこの透谷の一文において、われわれが注目しなければならないのは、ゴールドスマスの詩に描かれた山村の使われ方である。ここでもやはりその村里は、日々苦難にあえぐ人々が、いつかはそこに帰って安らかな生活を送りたいと願う、最終的な安息の場として捉えられているのだ。友からうち明けられた朝鮮蜂起の誘いを断って、まるでそれから逃れるかのように放浪の旅に出た透谷ではあるが、結果的に友を裏切ってしまったという「思い」からどうしても逃れることができない。旅の途次、いつ果てるかもしれぬ冬日の空をうち眺めながら、同じ漂泊の詩人ゴールドスマスが詠んだ心境を懐かしく思い起こして、涙に袖をぬらしたことも一度や二度ではなかった。そんな中で、ふと口をついて出た詩句、それが『荒村行』の次の一節であった。「わたしはいつも望んだものだ、わたしの長い苦難のあとで、ここに帰って、安らかに、最後は命を終えよう」と。そうだ、確かにゴールドスマスの言うとおりだ。「志を言ひ志を行はんとするものは必ずしも終生を勞役するに及」ばぬ。たまにはこの「正直男」が告白するように、時にはおのが故郷に立ち帰って、心安らかに過ごした日々のことを追想してみるのも苦難に満ちた人生には必要なことではないか。そう考えて、透谷は、七年前に大矢や秋山とともに過ごした幻夢の世界へと帰っていく。誰にも増して苦渋に満ちた青春期を過ごし、誰にも増して放浪の旅を愛した透谷、そんな透谷が

「狂ひに狂ひし」七年の心の軌跡をつづる文章の前文として用いたのが、同じ苦難にみちた人生と放浪癖とを特色とするイギリスの詩人ゴールドスマスの素直な心情の告白であった。

このように、明治初年から二十年代にかけて西洋の詩を鑑賞した作家や知識人にとって、『荒村行』の詩は、まるで陶淵明や西行法師の詩歌が喚起するような懐かしい詩情を心に呼び覚ますものとなっていた。一昔前ならば、「さびしさに堪へたる人のまたもあれな」の歌に托して語りはじめた紀行文や、回想記を、彼らは、好んで西洋の詩人ゴールドスマスの詩を枕に説き起こしていった。先にも記したようにそこに用いられている詩句に、日本人の心の琴線に触れるものがあつたというのがその理由であるが、『荒村行』の詩が移入されて十数年経った明治二十年代の半ばともなると、ここに例を引いた北村透谷の「三日幻境」や次章に取り上げる宮崎湖処子の『帰省』のように、当時の著名作家に作品構成上の重要なフアクターを提供するほど深く人々の心に浸透していった。しかも、そうした傾向は単なる一過性のものにとどまることなく、明治三十年代に入っても様々な作家の創作活動にまでその影響を広げていった。明治期における『荒村行』に対する解釈の変遷を辿ろうと思えば、当然そうした三十年代の創作活動への影響にも目を向けていかなければならないことになる。『荒村行』をめぐる解釈は、日本の文化や産業界の近代化が進む明治三十年以降も、旧来通りの桃源境的な解釈に終始していったのか、それともそこに何か新たな傾向が認められるようになっていくのか、その辺のところを章を改めて詳しく検証してみることにしよう。

二 産業構造の変革に伴う農村の荒廃―明治三十年以降の解釈

『荒村行』が発表された一七七〇年頃のイギリスというのは、ちょうど、国内の産業基盤が家内制手工業から工場制工業へと変化したいわゆる産業革命の始まった時期であり、社会全体が大きな混乱の渦中にあつた。特に農村地域では、穀物増産のため共同地と開放耕地が困い込まれていく一方で、工業の中心が農村から都市周辺へと移動していったため、多くの農業労働者は生産の手段を奪われ、仕事を失い、村を追われて他国に流離することを余儀なくされるといふ悲惨な状況が見られた。『荒村行』の詩一篇は、その題名も示す通り、このイギリスの産業革命初期にみられた農村の荒廃とそこに住む村人の困窮を背景として作

られた詩であり、作者の主眼は、過去の平穩無事な農村生活の描写より、むしろ、村が一人の大地主の有に帰し、村人は都会あるいは外国へと追いつてられて、人影も疎らになった惨状目を覆うばかりの村の現状描写の方に置かれていた。

そうした荒れ野と化した村の現実が描かれている箇所を、明治三十六（一九〇三）年十月に発表された千葉江東（亀雄）の訳とともに掲げてみると、だいたい次のようなものである。

Sweet smiling village, loveliest of the lawn,

Thy sports are fled, and all thy charms withdrawn;

Amidst thy bowers the tyrant's hand is seen,

And desolation saddens all thy green:

One only master grasps the whole domain,

And half a tillage stints thy smiling plain:

No more thy glassy brook reflects the day,

But choked with sedges, works its weedy way;

《愛らしき笑めるが如かりしこの村よ、／国中に最も愛らしかりし村よ、／爾の遊戯今や去りて、爾が快樂いまや消え失せぬ。
／汝の家の中には、たゞ暴君の腕あるのみ。／「荒廢」の黒き影、全き爾の原野と緑土とを掩ひたり、／たゞ一個の主人、
またき国土を掌握して、汝の笑めるに似たる／国土より、稼穡の半ばは廢れたり、／玻璃なせし小川、また日光を反射さず、
／空しくセツヂー草に咽んで、雑草多き汀を潜り行く。》

ところが、明治二十年代までの日本の読者は、どちらかというとこの荒廢した村の現状の方にはあまり関心を示さずに、牧歌的雰囲気漂う過去の田園風景の方に重点をおいてこれを鑑賞してきた。前章に詳述した通り、そこに東洋の詩風に通じるものを見て取ったというのがその主な理由であったが、一方で当時の日本の読者には、『荒村行』の背景となっている社会的事情がよ

く理解できなかったということも理由の一つにあってと思われる。明治二十年代までの日本の産業構造は、旧来型の手工業的な小規模生産を主とするもので、都市においても農村においても人々の生産手段や就労形式に以前のそれと大きな違いは見られなかった。そのような状況下で、社会組織の急激な変化に伴う農村の荒廃と村民の困窮の様子に光を当てた詩を繙いても、この詩が本来訴えたかった問題にまで関心を向けることはできなかったのではないだろうか。

しかし、日清戦争を境にそうした事情は一変する。日本においても、ようやく産業の基盤が、従来の手工業的な小規模工場を中心とするものから工場制工業を主とするものへと移行して、ちょうど『荒村行』が書かれた頃のイギリスと同じような状況が生じてきたのである。これは一般に日本の産業革命といわれているものだが、この変化に伴い、綿糸、鉄、石炭などの主要産物の生産が飛躍的に増大していく一方で、その反面、当時の日本国民の理解を越えた複雑多様な問題が発生し、イギリスの場合同様、農村地域にまでその深刻な影響を広げていった。²⁾

《近年鉱業上の器械洋式の発達するに従ひて其流毒益々多く、……毒渣の浸潤するの処茨城栃木群馬埼玉四県及其下流の地数万町歩に達し魚族斃死し田園荒廢し数十万の人民の中ち産を失ひ……業に離れ飢て食なく病て藥なきあり。老幼は溝壑に轉じ壯者は去て他国に流離せり。》

これは、明治三十四年の暮、足尾鉍山から生ずる鉍毒の害に苦しむ人々のあまりに悲惨な状況を目のあたりにした一人の老人が、死を覚悟の上で天皇に直訴した際の直訴文の一部である。いうまでもなくその老人とは天下の義人田中正造のことであり、田中の依頼を受けて、この歴史に残る名文をしたためたのは、後に大逆事件で処刑される幸徳秋水その人であった。鉍山から出る鉍毒の害は以前にも知られていなかったわけではないが、ここにあるように害毒が下流数十万町歩にも及んで、何十万もの周辺住民が産を失い業を離れ他国に流離することを余儀なくされたというようなことは以前にはなかったことだ。明治三十年以降日本の農村地域においても、産業構造の変革に伴う様々な問題が顕在化し、人々の心に影を投げかけていった。この直訴文はそのことを物語る一つの端的な例といえるだろう。

日本の文学者がそのような産業の近代化に伴う負の面を意識した最も早い例として、先に引用した『荒村行』の一節が掲載さ

れている千葉亀雄（江東）の『いざさらば』という作品をあげることができる。これは、東北の農村をふるさとにもつ在京の青年が、故郷荒廃の話を耳にして、実際にふるさとの山河に臨み、それを確認するまでの様子が、過去にそこで過ごした思い出とともにつづられている、いわば自叙伝的帰省記というような作品である。実は、この帰省記にはモデルとされた作品があった。それは、一八九〇（明治二十三）年六月に刊行された宮崎湖処子の『帰省』という作品である。構成といい着想といい、『いざさらば』がこの二十年代屈指のベストセラーを意識して書かれた作品であることは間違いないと思われるのだが、ただ一つ、宮崎湖処子の作品とは違う、ある重要なフアクターが存在する。それは、『いざさらば』の根底に存在する感情が、故郷に対する期待ではなくて、失望であるということである。

このたった一つの相違のために、『いざさらば』はモデルとされた『帰省』とはすっかり趣の異なる作品となっている。現実のふるさとがひたすら純化され美化されて描かれている湖処子の『帰省』とは対照的に、『いざさらば』の方は開巻第一章の標題からすでに「荒村行」という浪漫的な空想を拒む標題が掲げられている。しかもその標題のすぐ後には、その名の通りゴールドスマスの『荒村行』から抜粋した四行の詩文が英文のまま引用されていて、この点も「帰思」という標題の後に陶淵明の「田園の居に帰る」の詩文が掲げられた『帰省』の冒頭とは好対照をなすものとなっている。

注目すべきは、その『荒村行』からの引用箇所が、明治二十年代までの日本の作家たちが好んで引用した牧歌的田園風景が詠われた箇所ではなくて、一篇の最後の方に置かれた「おお贅沢よ、汝、天の法令によって呪われたるもの、／お前と引き替えにこんなに色々のものが失われてしまったのだ。／お前の一服が狡猾な喜びをもって／ただ破壊せんがためにその快樂を広めたのだ。」⁽³²⁾という村の荒廃の現実⁽³²⁾に目を向けた場面である。それは出典も明らかにされず英文のまま掲げられているものではあるが、作中語られる主要テーマ、すなわち故郷喪失という主人公にとつての痛恨のテーマを予告するかたちでそこに置かれたものであり、そのことは章の最後になって判然とする仕組みになっている。「故郷は滅亡に瀕せり」という知らせを同郷の友から聞いた夜、主人公は都会の部屋に独り居て、梧桐の病葉をそよがす風の音にいい知れぬ寂寥感を覚えながら、大陸漂浪の詩人ゴールドスマスの『荒村行』を繙く。そしてそこで読んだ内容が、そのまま邦訳され、第一章を締め括るかたちで章の末尾に置かれているのだが、その邦訳された箇所がまた巻頭の四行同様、一人の地主のために荒廃の黒き影が緑土を覆うという、先に引用した村の荒廃の現実⁽³⁴⁾に目を向けた箇所であった。

われわれが注意を向けなければならないのは、その故郷の荒廃を引き起こした原因は何かということである。作中、その原因に触れたものとして、たとえば、「何時よりとは知られず、酒に沈湎する悪風、村人の間に養はれ来たりぬ。影なき悪魔は、天よりも濶き翼を拡げて、家より家、小路より小路、またき一村を廻りつ。……」というような文章をあげることができる。つまり、千葉の意識が捉えた故郷荒廃の原因とは、われわれ現代人が日々目にしているような過度の自然破壊の結果ではなく、村人のゆきすぎた飲酒癖によるものであった。しかし、水俣病やダイオキシン問題を経験してきたわれわれ現代人には、千葉の脳裏をかすめていた不安の原因がそれとは違った、もつと根の深いところに存在したということがわかつている。作中に見える「一木斬られ寸土鋤かれ、……其情なき荒廢の跡見ては……」という表現から察して、あるいは小島鳥水がこの作品に寄せた序文の中に、「我が曾て出沒嬉戯したる某家の花園は、煤煙鉄臭の製糸場となりぬとも……」というような言葉があることなどから判断して、それが、明治三十年以降の産業構造の転換に伴う環境の変化に起因していたことは明らかである。千葉のあがる飲酒の弊風も、広い意味でこの産業構造の変化のもたらした社会のひずみの一つと考えることができるだろう。

ほんの少し前まで存在した美しい自然、あるいは健全な精神が崩壊していくという喪失感、寂寥感が、産業の近代化が進むにつれ、文学に携わる人の心にもはつきり意識されるようになった。『いざゝらば』という作品が構成および着想のほとんどを湖処子の『帰省』に借りていながら、『帰省』とはまた異なった趣の作品となっている最大の要因は、作品の根底に潜むこの喪失感である。「あゝ味気なふる里よ、一木斬られ寸土鋤かれ、知る人亡せて山河亡びぬ、かくてわれ何のふる里ぞ。其情なき荒廢の跡見ては、またく知らぬ他しの里よりも、なほ一入に味気なくも思はる可きを、われはた何の故ありて、再び蹤をそこに止むべき」。われわれは、ここに至って日本人の故郷に対する意識に新たな傾向が加わったことを知る。従来の故郷が憧れの対象、郷愁の対象としての故郷であったのに対し、ここに示されている故郷は目をそむける対象としての故郷である。もちろん、「石をもて追はるるごとくふるさとを」という類の、個人的理由によって懐かれたふるさとに対する憎悪の感情は過去にも存在した。しかし、産業の近代化に伴う自然破壊のためにも無残な姿の故郷に嫌気がさしたという例は、恐らくこの時以前にはなかったことではないだろうか。「子子浮ぶ溝のはて、そに倒るるとも」、「われ三寸の息休まざる間、再び帰りてわが故郷を見じ」。「いざゝらば」という標題の通り、この言葉を最後に主人公はふるさとに永の別れを告げるのだが、この主人公、あるいはこれを書いた千葉亀雄は、この時以降、故郷に対する愛着を失ってしまうのだろうか。いや、決してそうではないと思う、彼はただ現実の故郷を離

れたただけだ。「ふるさと」は遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの」、日本人の故郷に対する意識は明治三十年を境に屈折を余儀なくされていく。

『いざゝらば』という作品は、このように、過去の美しい故郷の山河に対する追慕の気持ちと、現実の故郷への失望の念が、陶淵明の「帰去来の辞」やゴールドスミスの『荒村行』の詩のイメージと重ね合わされてつづられた、自叙伝的帰省記である。その源流をたずねれば、間違いなく明治二十年代の田園文学の流行に行き着く。その明治二十年代の田園文学の流行がいかなる性質のものであったか、それは理想郷的雰囲気をつたえた『帰省』が明治二十三年の初版発行後、わずか三年で十回も版を重ねていることから判断できる。『帰省』が人気を博したこととゴールドスミスの『荒村行』が大流行したことは、一見なら関係がないように思われるが、実は大変密接なつながりがあった。そのことは『帰省』の重版の巻頭に掲載されている、「本書に関する各新聞雑誌の批評」の中に明瞭に見て取ることができる。「吾人は之を読み来り、宛もゴールドスミスが荒村感懐の詩を誦するが如く寛ゆるなり」(『国民之友』、徳富蘇峰筆)、「湖処子の詩文がゴールドスミス、アーヴキングに彷彿たるに二子の文章に得るところありて然る者なるか……」(『東京新報』)。つまり、明治の識者の多くにはこの帰郷の記が、陶淵明、ゴールドスミス、ワシントン・アーヴィング(当時彼は「亞米利加のゴールドスミス」と呼ばれていた)などの田園文学と似た味わいの作品と受け止められていたのであり、二十年代の『帰省』、『荒村行』、『スケッチブック』の流行は、最終的には、すべて同一の牧歌的田園趣味を基盤としていたことができるのである。

三十年代に入っても、こうした牧歌的田園趣味の文学それ自体は決して消えることなく続いていくが、日本の産業構造が大きく変化する三十年代になると、人々の価値観あるいは自然観にはつきりとした変化が生じ、それにもなつて田園趣味の文学に従来とはまた違った傾向が見受けられるようになる。その傾向の違いは、『帰省』と『いざゝらば』という、同じように陶淵明やゴールドスミスの詩のイメージと重ね合わされてつづられた帰省記が、一方は牧歌的田園生活の描写に主力が注がれ、一方は荒廃した故郷への失望の念を書き連ねることに中心が置かれている、という点にはつきりと現れている。

千葉亀雄は、湖処子の『帰省』の構成を借りて、見るも無惨な故郷荒廃に対する無念の思いをつづろうと思った。しかし、荒廃の現実をつづろうというのであるから、『帰省』の全篇に漂う牧歌的架空世界の雰囲気は一部の箇所を除いてできるだけ消していく必要がある。そこで彼の脳裏に浮かんだのが、『帰省』の背景にあったゴールドスミスの『荒村行』の詩を湖処子とはまった

く違った方法で利用するということであった。つまりこの詩の牧歌的部分ではなく、村の荒廢の現実を詠んだ部分、それを前面に打ち出して彼の心に消えやらぬ無念の思いをつづろうと考えたのだ。

『帰省』の三十年代版ともいうべき『いざよらば』が、それまでの田園文学とはすっかり趣を異にする作品となっているのは、背後にそのような制作上の意図が働いていたためである。ともあれ、それは、『荒村行』の中の荒廢した農村というこの詩本来の部分に注意が向けられた日本における最初の例であった。産業の近代化が急速に進展する中で、自然も人心も変化していくことを余儀なくされた明治三十年代という時代が、日本の作家をも自ずとそういう方向に向かわせていったのである。

[注]

1 *The Deserted Village* (一七七〇年 ロンドン刊) の明治時代の翻訳とテキストは以下の通り。

[翻訳]

明治八(一八七五)年以前

中村敬宇「僻村牧師歌」(『敬宇詩集』中、敬宇詩集刊行発行所、一九二六年)三四―三五丁。

西村茂樹の伝えるところによると敬宇がこの詩を訳したのは一八七五(明治八)年以前であったという(『洋々社談』八号、一八七五年)。西村は「山村牧師歌」と記しているが、『敬宇詩集』では「山村」が「僻村」となっている。訳例は本文第一章参照。

明治二五―二六(一八九二―一八九三)年

磯辺弥一郎「寒村行」『英文学講義録』第一卷(国民英学会出版局、吉岡書籍店、明治二五(一八九二)年)原文一三一―一五頁、注
積二二―二四頁、講義四七―五一頁。『英文学講義録』第二卷(国民英学会出版局、明治二五(一八九二)年)原文一五―一九頁、
注積二九―三一頁、講義五八―六五頁。『英文学講義録』第三卷(国民英学会出版局、明治二五(一八九二)年)原文八―一〇頁、
注積一九―二二頁、講義三五―三八頁。『英文学講義録』第四卷(国民英学会出版局、明治二六(一八九三)年)原文一三―一五
頁、注積二八―三一頁、講義五〇―五三頁。

The Deserted Village の原文を掲載し、それに「注釈」と「講義」を加えたもの。磯辺は明治二二(一八八八)年二月に創設された私立の英語学校、国民英学会の会主。彼はそこで自ら教鞭をとる一方、講義の内容を『英文学講義録』として出版した。全部

で七巻ある彼の『英文学講義録』は当時相当の評判を得ていたとみえ、内田魯庵の『文学者となる法』には「磯辺弥一郎先生の『英文学講義録』中の日本人の解釈だけを辛抱して読めばエライ学者となる事勿論なり」とある（同書五三頁）。「講義」は直訳調の全訳となっているが、その冒頭部分を紹介すると次の通り。

《嗚呼美ナル翁ばるんヨ、其地方ニテ最モ愛ラシキ村ヨ、此処ニハ身体ノ健康ト五穀ノ充足トガ勞役スル黎首ヲ慰メタリ（農夫ハ身体健康ニシテ五穀充足シ勞スル丈ノ甲斐ハアリ）此処ニハ笑顔ヲ作レル春ガ最モ早くヨリ訪ヒ来リ……》

後出の千葉江東、久保天随は国民英学会に一時籍を置いていたことがあった（『中外英字』二五卷一〇号、一九一八年）。

明治二七（一八九四）年

大和田建樹「荒村」『欧米名家詩集』下巻（国民文庫第三編、博文館）六三—九三頁。

前項の磯辺弥一郎の『英文学講義録』と同一の章分けが施され、全体の二六章の内前半の二二章が邦訳されている。（後出の久保、天野共訳『寒村行』も一箇所を除いてほぼ同じ章分けになっている。）冒頭六三—六四頁にかけてゴールドスマスの略伝が付されている。訳例は本文第一章参照。

明治二八（一八九五）年？

坂田典治「廃村落」『東京専門学校邦語文学科第一回一年級講義録』（刊年不明）一一—五一頁。

明治三三（一九〇〇）年九月発行の『東京専門学校講義録之栞』に記載された「講義録の由来」によれば、東京専門学校の文学科で初めて講義録が発行されたのは明治二八年とあり、これは第一回一年級の講義録であることから、同年に発行された最初の文学科の講義録の一つではなかったろうか。いずれにしても明治二八年以降のものであることは間違いない。

明治三六（一九〇三）年

千葉亀雄（江東）「荒村行」『いぢやゝらば』（太平洋館）一、一九—二二、六〇—六三頁。

『いぢやゝらば』という作品は創作であり、翻訳書とは異なるが、全体が八章に分けられているこの作品の第一章には「荒村行」の標題が掲げられ、冒頭に *The Deserted Village* の “O Luxury!” 以下の四行が原文のまま掲げられ、さらに章末には “Sweet smiling village, loveliest of the lawn” 以下の同詩の邦訳が四頁にわたり引用されている。また、二章の章末にも同様に、居酒屋に村人が集まってビールを飲み交わしたかつての村の生活が描かれた場面の邦訳が四頁にわたって引用されている。訳例は本文第二章参照。

同年

久保天随・天野淡翠『ゴールドスマス寒村行』（外国語研究叢書）鐘美堂。

「緒言」九頁、「『寒村行』の著者が此作篇に就きてジョシュア・レ井ノルズに贈りたる書簡」一〇―一二頁。原文＋訳文、上巻一―三六頁、下巻一―七七頁。NOTES 一五頁。「緒言」はゴールドスミスの評伝と、この詩の解説を内容とする。坪内雄蔵の手になる『英文学史』の内容と一致するところが多く、同書をもとにして書かれた可能性が高い。原文はI、IIの二章からなり、Swintonの *Studies in English Literature* と同一の分け方がなされている。訳文は上巻九章、下巻一五章から構成され、磯辺の『英文学講義録』とほぼ一致する。訳は同詩の全訳。NOTES は Swinton のとも、磯辺のとも異なる独自のもの。日本で刊行された本詩唯一の単行本である。訳文は意識で、原文と合わない箇所が目立つ。冒頭六行は以下の通り。

《あはれゆかしきオーバンの／野中の村を恋くれば／思ひ出おほきわが身かな。／ゆたけき畑に鋤をとる／賤のをのこも健やかに／さちある業にいそしみつ。》

この訳文は明治三八（一九〇五）年刊行の久保天随著『美文／韻文 夕紅葉』（日高有隣堂発行）にも再録されている。

明治四四（一九一一）年

岡村愛蔵『The Deserted Village』須因頓氏 英文学詳解』上巻（興文社）三六二―三九二頁。

「ゴールドスミス小伝」（邦訳のみ）、「ゴ―ルどすミスにかれノ賛辞」（原文、邦訳）が冒頭にあり、その後同詩の原文、注、訳文が全体を二三節に区切って掲げられている。この岡村訳の『英文学詳解』は当時かなりの売れ行きを示し、明治四五（一九一二）年三月には四版、大正一二（一九二三）年一月には一二版を数えている。冒頭部分の訳例は以下の通り。

《『可愛の Auburn よ。草原中の最も愛すべき村よ。健康と豊饒が辛勞する所の農夫を慰め。破顔微笑の春は一番早く此地に來り。去らんとして未だ去らざる夏の炎暑は逡巡として此地に止まり……』

〔テキスト〕

明治二二（一八八九）年

“The Deserted Village” in *Studies in English Literature*, Vol. 1, ed. William Swinton, Sanseido, pp. 223—241.

（同詩の全文が掲載されている。該書は明治期最もポピュラーな英文テキストの一つで、明治三七（一九〇四）年には一二版が発行されている。）

明治二五（一八九二）年以前

『ゴールドスミス著 荒村行』（英詩抄一）、吉岡書籍店。

（本書は国会図書館にも所蔵されておらず、筆者も未見だが、上記の磯辺弥一郎の『英文学講義録』第一巻の巻末の広告「吉岡

書籍店出版英文教科用書」の中に見える。定価五銭と値段も記載されていることからみて発行されていたことは間違いなさそう
た。)

明治二七(一八九四)年

“The Deserted Village” in *Studies in English Literature*, ed. William Swinton, Sanseido, pp.127-145.

(二二年発行の同書を一冊に縮約したもの。ただし『荒村行』に関しては全文が掲載されている。)

明治二八(一八九五)年

“Deserted Village” in *Goldsmith's Essay and Poems*, Fusanbo, pp.122-141.

(富山房書店の“English Classics”シリーズの第三巻。同詩の全文を掲載。)

明治二九(一八九六)年

“The Deserted Village” in *School English Classics*, Maruzen, pp.50-66.

(丸善発行の英米文学アンソロジーの中の一編。同詩の全文を掲載。)

明治四四(一九一一年)

“The Deserted Village” in *The World's English Readers No. 5* by H.Saito and F.Brinkley, Nichi-Eisha, pp.61-62,100-102,120-121,138-140.

(日英社発行の文部省検定済の教科書。本書は齋藤秀三郎、F・ブリンクリー共著の有名な教科書で大正三(一九一四)年には六版発行。同詩の中の山村牧師や教師の登場する有名な場面が四章に分けて掲載されている。全体四三〇行の詩の内一四八行を収録。)

2 ここに名前を記した作家、およびその他の作家の書いたゴールドスミス関係の作品をあげると以下の通り。ただし上と重複するものは除く。

志賀重昂「敦爾德斯彌斯氏ノ荒村感懐(“Deserted Village”)ノ詩ヲ読ミテ感アリ」『南洋時事』(丸善、明治二〇(一八八七)年)一〇五—一二六頁。

武信由太郎によれば志賀の出身校である札幌農学校では明治一三(一八八〇)年に同校に赴任した James Summers が『荒村行』などの詩をさかんに暗誦させたということである『英語世界』Vol. III, No. 1, 一九〇九年』。

硯湖亭秋月(山県五十雄)「ゴールド・スマスの伝」『文園』六号(明治二二年(一八八九)年)

内田魯庵(藤庵主人)「ゴールドスミスを評す(其一)」『女学雑誌』一七九号(明治二二(一八八九)年)一三一—一六頁。

魯庵は『国民之友』が明治二二年、諸家に行った愛読書調査に答えて「Deserted Village, and Traveller」を愛読の一書にあげている。同誌四八号。

北村透谷「泣かん乎笑はん乎」『女学雑誌』二二〇号（明治二三（一八九〇）年四月）

文中に次の一節が見える。「行いてゴールドスミスの荒村の詩を読め、老者手の衰へても寄る可きなく、独り残されしが故に止むなく小河が衣る苔菜を摘み、棘中より薪料を集めて僅に今夕の食を得るが如きは豈に詩人の想像の中にのみ止まらんや、公伯の益す昌へて農民の日に凋衰するを見ずや、嗚呼外面に歎声を聞き裡面に血涙の滴るを見る、斯の如きは民を思ふの士の豈に能く憂悶するなきを得る所ならんや。」

無署名「ゴルドスミスと楽譜」『国民之友』一二八号（明治二四（一八九一）年三三頁）。

宮崎湖処子「両秀才」『国民新聞』（明治二五（一八九二）年四月）

未見。柳田泉『西洋文学の移入』（春秋社、一九七四年）による。

北村透谷「三日幻境」『女学雑誌』三二五、三二七号（明治二五（一八九二）年八、九月）

冒頭に『荒村行』からの英文の引用がある。詳しくは本稿第一章参照。

戸川残花（安宅）「詩伯ゴールドスミスの三籟」『三籟』二一四号（明治二六（一八九三）年）

夏目金之助「英国詩人の天地山川に対する観念」『哲学雑誌』八卷三六号（明治二六（一八九三）年）

羽化仙人（渋谷保）『支邦哲学者 欧洲巡遊通信』上、下巻（寸珍百種、第二八、二九編）

「ゴルドスミスの The Citizen of the World（一七六二年）の訳。下巻末に「付録／原著者ゴールドスミスの伝」（一一二三頁）がある。渋谷にはこの訳書の他に『英国文学史』（博文館、明治二四年）の著作があり、その一七七―一七八頁にゴールドスミスの記述がある。

網齋主人「ゴルドスミスの伝」『日本之少年』六卷三号（明治二七（一八九四）年）一一一九頁。

大和田建樹「オリヴワー、ゴルドスミス」『英米文人伝』（国民文庫第九編、博文館、明治二七（一八九四）年）六三―七二頁。

円環子「ゴルドスミスの詩格」『佳友会雑誌』八号（明治三〇（一九〇七）年）一―六頁。

坪内雄蔵（逍遙）『文学叢書 英文学史』（東京専門学校出版部、明治三四（一九〇一）年）五三〇―五三六頁。

高須梅溪「ゴルドスミスの一生」『青春雑筆』美也古書房（明治三九（一九〇六）年）一〇三―一〇四頁。

3 The Vicar of Wakefield（一七六六年刊）の明治期に発行された翻訳とテキストは以下の通り。

〔翻訳〕

明治二二（一八八九）年八月

植木貞次郎（泰東居士）『家庭教育 園之咲分』上、下巻（開新堂、下巻は二三（一八九〇）年五月出版）

明治二八（一八九五）年一〇月

井上歌郎「ヴィカー氏ノ家庭教育譚」『通信 英語学教授書』五号

冒頭第一章の三分の一ほどを原文を掲げ対訳したもの。

明治三六（一九〇三）年一月

加藤眠柳『質素儉約の話』（家庭夜話第二冊）内外出版協会

同年七月

浅野和三郎『ヴィカー物語』大日本図書株式会社

巻頭に「ゴールドスミス評伝」が一―二頁までである。本書は大変好評を博し明治三九年九月には五版を發行。

明治三七（一九〇四）年一月

イーストレーキ 喜内芳樹『ヴィカー、オヴ、詳解』上巻、金刺芳流堂

一六章までの前半部分の注釈。下巻は未見。再版巻末の同書店の發行目録にも上巻のみしか記載されていないところから、恐らく發行されなかったのではないか。内容は注釈が主だが所々に訳文が掲載されている。

以上の他、村上浜吉監修『明治文学書目』（飯塚書房、一九七六年）には、

関屋孝楠訳述『第一篇 村の花 「一名」ピーカー、ラフ、ウキクファイル』開進堂

という書名も見えるが、發行年の記載がなく実際に發行されたものか未詳。国会図書館の蔵書目録にも載っていない。〔テキストその他〕

明治二〇（一八八七）年 *The Vicar of Wakefield*. T. Yoshioka. 97p.

二一（一八八八）年 *Notes on Goldsmith's Vicar of Wakefield*, by J.M.Dixon. Kyoyekishosha. 168p.

二三（一八九〇）年 *The Vicar of Wakefield*, ed and annotated by F.W.Eastlake and Sakuma. Sanseido. 199p. (明治二四年九月四版出版)

三八（一九〇五）年 *The Vicar of Wakefield*, abridged and annotated by Aizo Okamura. Kobunsha. 149p.

四三（一九一〇）年 *The Vicar of Wakefield*, by H.Saito. 2 vols. Kobunsha. vol.1, 150p., vol.2, 204p.

- 4 内田 前掲論文、一三一—一四頁。
- 5 戸川 前掲論文(『三籟』第二号)四一頁。この論文は『三籟』の二—四号に連載されたものだが、三号以下「ゴールドスミス」という標題になっている。
- 6 宮崎八百吉(湖処子)『ラルツワルス』(拾式文豪第四卷) 民友社、明治二六(一八九三)年、一八一—二二〇頁。
- 7 「ラルツワルス」(『文学界』第一号、明治二六(一八九三)年)二七頁。この書評には筆者の記名はない。
- 8 Arthur Friedman ed., *Collected Works of Oliver Goldsmith Vol. IV*, Oxford Univ. Press, 1966, p.287.
- 9 大和田 「荒村」(前掲書)六四—六六頁。
- 10 夏目 前掲論文『漱石全集』第二二卷、岩波書店、一九五七年)一三六頁。
陶淵明の作品等に関する引用は次の二書による。
- 11 一海知義『陶淵明』(中国詩人選集 四) 岩波書店、一九五八年。
石川忠久『NHK漢詩をよむ 陶淵明』、日本放送出版協会、一九八九年。(これは日本放送協会編集の雑誌。)
- 12 石川 前掲雑誌、二〇頁。
前掲雑誌、七八頁。
- 13 一海 前掲書、二五頁。
- 14 内田 前掲論文、一四—一五頁。
- 15 石川 前掲雑誌、一六八頁。
注3参照。
- 16 「漱石山房蔵書目録」(『漱石全集』第三三卷、岩波書店、一九五七年)一六頁。
- 17 荒正人『増補改訂 漱石研究年表』集英社、一九八四年、八五七頁、参照。
- 18 徳富猪一郎(蘇峰)『文学漫筆』(国民叢書) 民友社、明治三一(一八九八)年、二二—二三頁。
- 19 中村 前掲書、三四—三五丁。
- 20 Arthur Friedman, *loc. cit.*, p.294.
- 21 日夏耿之介『明治大正詩史』(『日夏耿之介全集』第三卷、河出書房新社、一九七五年)七九頁。
- 22 内田 前掲論文、一六頁。

- 25 北村透谷「三日幻境」(『女学雑誌』三二五、三二七号、明治二五(一八九二)年八、九月)。ここでは次の書物に収録された同文から引用した。『北村透谷集』(明治文学全集 二九)筑摩書房、一九八四年、一八三—一八七頁。
なお、同文に引用された二行の詩句を含む原文の一節を掲げると以下のとおり。
- In all my wandering round this world of care, / In all my griefs, — and God has given my share — / To husband out life's taper at the close, / And keep the flame from wasting by repose; / I still had hopes, my latest hours to crown, / Amidst these humble bowers to lay me down; / I still had hopes, for pride attends us still, / Amidst the swains to slow my book-learn'd skill, / Around my life an evening group to draw, / And tell of all I felt, and all I saw; / And, as a hare, whom hounds and horns pursue, / Pants to the place from whence at first he flew, / I s till had hopes, my long vexation past, Here to return — and die at home at last.
- 26 G・M・トレヴェリアン『イギリス史』三、みすず書房、一九七五年、九七一—〇九頁参照。
- 27 Arthur Friedman, *loc. cit.*, p.288.
- 28 千葉 前掲書、二〇頁。
- 29 隅谷三喜男『日本の歴史』二二(中公文庫)中央公論社、一九七四年、六一—八九頁参照。
- 30 『田中正造全集』第三卷、岩波書店、一九七九年、五頁。
- 31 宮崎湖処子『帰省』(垣田純朗、明治二三(一八九〇)年)一頁。
- 32 『こゝろば』の冒頭の英詩四行は以下の通り。
- Oh Luxury! thou cursed by Heaven's decree,
How ill exchanged are things like these for thee!
How do thy potions, with insidious joy,
Diffuse their pleasure only to destroy!
- なお、本文中の訳文は鈴木建三氏のを借用した。鈴木建三「見捨てられた村」(『世界名詩集大成』九、平凡社、一九五九年)一八三頁。
- 33 千葉 前掲書、九頁。
- 34 前掲書、一九—二二頁。
- 35 前掲書、一一頁。

- 36 前掲書、二七九頁。
- 37 前掲書、「序」二頁。
- 38 前掲書、二七九頁。
- 39 前掲書、二八〇頁。
- 40 宮崎 前掲書、一〇版（明治二六〔二八九三〕年五月）「本書に関する各新聞雑誌の批評」五頁。
- 41 前掲書、同「……批評」、七頁。
- 42 浅野 前掲書、「ゴールドスミス評伝」九頁。